

14年前、奈良放火少年の調書漏えいで有罪 医師・崎濱盛三さん

2006年、奈良県で起きた高校1年の少年による放火殺人事件で、発達障害がある少年の鑑定書や調書を漏えいしたとして、有罪判決を受けた医師がいた。調書は事件を扱った書籍「僕はパパを殺すことに決めた」にはほぼ転載され、社会問題化した。その医師は、今も京都市内の病院で診察を続け、子どもの発達障害をテーマにした本の執筆を続けている。2017年の有罪判決後、医師は初めてメディアの取材に応じ、事件を振り返りながらも、「発達障害に苦しむ子どもへの思いを語った。」(辻智也)



崎濱さんの著作「発達障害が映す子どもたち」

「発達障害って、個性とか、発達の凸凹とか言うでしょ。そんな単純なものじゃないです。当事者は本当にしんどい」。京都市郊外にある洛和会音羽病院(山科区)の階、神経精神科の診察室で、白衣姿でかつぶさのいり同科副部長・崎濱盛三(医師)は、発達障害について淡々と語った。事件を巡る警察捜査を顧みない行動から、とがった人物像が想像されるが、対面する子どもはひびひとした態度で、な人柄がにじむ。発達障害の話は聞きたくない。でも、医師を志していたわけでもない。物理を学び、医学部のない大学に入り、予備校で教えたこともある。「物理は途中で面白くななくなっちゃって。哲学ベースの精神医学に興味を持ったんです」。崎濱さんは29歳で京都大学医学部に入學し、当時精神医学の第一人者として知られた木村敏氏に学び、1994年に精神科医の道に踏み出した。

■「事件起こしやさい」は誤り 「90年代は、発達障害自体が社会に知られてなかった。少年犯罪の背景に

発達障害、「個」の心 突き詰め治療を



発達障害に苦しむ子への思いを語る崎濱盛三さん(京都市山科区・洛和会音羽病院) 撮影・松村和彦

「苦しさ、甘く見てはいけない」

発達障害が潜んでいるなんて、専門家は滋賀県内の病院に勤め、99年から大津家裁で医学的アドバイスを非常勤の医務室技官となった。あるとき、脅迫事件を起こした中学3年の少年を鑑定した。小学1年の時に隣のクラスの担任だった教師に対し、中3になってから「殺す」などのビラをまいた。小1の時、教師から給

食を残したと勘違いされ、注意を受けたことへの恨みが動機だったとされた。 「普通に考えると、ひどい逆恨み。でも、少年なりのロジックがあったんです。崎濱さんは、絡まった糸をどきほぐすように、説明していく。少年は、自閉スペクトラム症が原因で、注意を受けて周囲から白い目で見られたことが、色あざない特別な記憶になった。記憶は何度も頭の中で繰り返し再生され、少年は非常に固執して「注意を受けるときにセツトしたい」という強い要求を抱えていた。

そして、教師から誹罪を受ければ「セツト」できると考え、その教師も周囲から白い目で見られるように、誹謗中傷のビラをまいた。 「当時発達障害と少年を扱った文献や知見も少なく、まるで応用問題を解いているみたいでしたね」と振り返る。

その後も、崎濱さんは刑事事件でたびたび鑑定人を務め、「発達障害と犯罪の関係について問題提起してきた。一方で、発達障害が事件報道で取り上げられ、課題も浮上した。『犯罪を起こしやさい』と誤解されている」と険しい表情をする。

崎濱さんが事件前から勤務する病院(京都市山科区)

の鑑定経験から「思考の筋道が独特なことがあり、結果として事件が奇妙や残酷に見えることがあるから、耳目を引くだけ」とし、「決して発達障害があるから事件を起こすわけではない」と強調する。 精神鑑定も、責任能力を軽くすることが目的ではなく、「その子の思考の筋道を審判に反映しなければ、真相に迫れない」と考えている。

■奈良事件 本の内容に絶句

2006年、崎濱さんに、奈良家裁から鑑定の依頼が来た。高校1年の少年が自宅に放火し、少年の母と姉妹の計3人が死亡した事件だった。 鑑定の結果、崎濱さんは、少年には広汎性発達障害があり「一度犯行を決意したら変えられない」という強迫性が影響した」と発達障害の影響があるとした。しかし、報道は被害者が少年の義母だった点を強調するなどセンセーショナルな方向に傾いていた。

「悪質な殺人犯」というレッテルを何とかけた。崎濱さんは、旧知のジャーナリストに、鑑定書や調書を見せ、事件の真相を伝えた。 その後、ジャーナリストは、調書をほぼ引用した書籍「僕はパパを殺す」ことに決めた。出版した。しかし、発

達障害の影響はわずかに触れられただけだった。崎濱さんが、書籍化を知ったのは出版前日。「まさか、こんな本に……。内容に絶句した。 翌年、崎濱さんは秘密漏示容疑で逮捕された。裁判で「正確な報道のため」に提供した」と主張したが、裁判所は「独善的」とし、12年に有罪判決が確定した。崎濱さんが医療顧問を務めていた情緒障害児の治療施設からは、処分しないよう求める嘆願書が出された。

■症例基に著書で解説

崎濱さんは今も、事件前から勤務する音羽病院で臨床医を続け、時に重大な刑事裁判で被告の鑑定も行う。今年、自身が診た症例を基に書籍「発達障害が映す子どもたち」を刊行し、続編を執筆中だ。 全巻の書籍は、子どもの成長段階を「就学前」「小学校低学年」「小学校高学年」「中学生」「高校生」に分け、各巻でそれぞれ26、27人の症例を匿名で紹介している。登場するのは、遊びのルールが分からずひとりぼっちになってしまふ幼稚園児や、すくつかつとなって友達をたたいてしまふ小学生たちだ。

「発達障害が映す子どもたち」は、ミネルヴァ書房から既に1巻(2400円)と2巻(2500円)が刊行。来年以降、3〜5巻が出る予定。

■患者の人生進むのが喜び

この間、「発達障害」は広く認知されるようになり、専門の医療機関も増えた。しかし、「発達凸凹」しているだけなので、長所を伸ばせば良い」などの単純化された認識も拡大し、崎濱さんは「甘く見てはいけない」と手厳しい。 たえば多動の症状がある子に対し、ASD(自閉スペクトラム症)由来か、ADHD(注意欠如・多動症)

由来かを誤診し、治療法や投薬も間違ってしまうケースがある。また、「ゾレゾレゾーン」という曖昧な診断により、その後の通院が途絶え、生きづらさを抱えたまま成長する子どももいるという。 崎濱さんは「発達障害は年齢や環境によって変数が大きい。だから『個』の心突き詰めて診断し、治療しないと推測する。幼稚園や学校の先生、保護者からも詳しく子どもの様子を聞き取り、診断や治療に反映するのが崎濱さんの手法だ。

これまでに診察してきた発達障害の患者は2千人余り、十数年に及ぶ付き合いのある子が何人もいる。東京や福岡からも、崎濱さんを頼って訪れる人がいるという。 取材の最後、医師としてのやりがいや喜びを尋ねた。崎濱さんは「長年診ていた子が、高校に行けたり、就職が決まったり。人生を一歩でも進めてくれるのが一番の喜びです」とほほえんだ。そして、あいさつも手短かに速足で診察に向かった。

「発達障害が映す子どもたち」は、ミネルヴァ書房から既に1巻(2400円)と2巻(2500円)が刊行。来年以降、3〜5巻が出る予定。